

発達障害の子どもへの支援に求められる養護教諭の役割Ⅱ

矢野 洋子^{*1}・猪野 善弘^{*2}

^{*1}九州女子大学子ども健康学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

^{*2}大分市立横瀬西小学校教諭 大分市大字横瀬2469 (〒870-1173)

(2015年11月12日受付、2015年12月17日受理)

要 旨

養護教諭に求められる職務内容もけがや病気への対応や保健指導という基本的な内容に加え、子どもを取り巻く環境の変化により、様々な家庭環境の子どもへの心理的なサポートや発達障害の子どもたちへの支援、保護者への支援など多角的な専門性が必要とされてきている。特に発達障害の子どもたちへの支援については、個別に対応が可能な保健室が利用されることは多く、発達障害をもつ子どもたちと関わる機会が多くなっていることや、またその内容は専門性が求められるものであることから、学校現場における発達障害を持つ子どもたちへの養護教諭の役割を調査研究により明らかにしたいと考え「発達障害の子どもへの支援に求められる養護教諭の役割Ⅰ」においてその結果を報告した。

今回は実際の学校現場でのエピソードを報告し、エピソードから養護教諭の役割について考察を試みた。

その結果、養護教諭は担任と比較して子どもたちと個別に関わることが多く、子どもたちの「困り感」に気付く可能性が高くそのような情報を学校の中で共有していくきっかけとなりやすいこと、また子ども達への支援に関わる可能性が高く発達障害への専門的な知識が必要であるが、支援の根幹には基本的な信頼関係の構築と、子どもを思う心が必要であることを論じた。

キーワード：養護教諭 発達障害 支援 学校における協働

1. 問題と目的

日本養護教諭教育学会では、2003年に養護教諭の役割について、「養護教諭とは、学校におけるすべての教育活動を通して、ヘルスプロモーションの理念に基づく健康教育と健康管理によって、子どもの発育・発達の支援を行う特別な免許を持つ教育職員である」¹⁾とした。

また文部科学省は、平成9年保健体育審議会答申において、養護教諭の新たな役割として、「養護教諭は、児童生徒の身体的不調の背景に、いじめなどの心の健康問題が かかわっていること等のサインにいち早く気付くことのできる立場にあり、養護教諭の『ヘルスカウンセリング（健康相談活動）』が一層重要な役割を持ってきている。養護教諭の行うヘルスカウンセリングは、養護教諭の職務の特質や保健室の機能を十分生かし、児童生徒の様々な訴え

に対して、(中略)心や体の両面への対応を行う健康相談活動である。(中略)養護教諭については、現代的課題など近年の問題状況の変化に伴い、健康診断、保健指導、救急処置などの従来の職務に加えて、専門性と保健室の機能を最大限に生かして、心の健康問題にも対応した健康の保持増進を实践できる資質の向上を図る必要がある。」²⁾という答申をしている。

我々はこのように養護教諭に求められる役割は、子どもを取り巻く環境の変化に(社会の変化)応じて変化していることを、養護教諭を養成する立場や現場を通して強く感じている。子どもたちを取り巻く様々な環境の変化、特にいじめや虐待の問題、また発達の問題を抱える子ども達への支援の必要性の増加から、養護教諭の主な役割と考えられてきたけがや病気への対応、保健指導という内容から、現在の学校現場で求められる職務内容が変化せざるを得ないとも言えよう。その中でも、自閉症スペクトラム障害や注意欠陥多動性障害などの発達障害の子ども達への支援が増加しているのではないかと考え、今回は発達障害の子どもたちへ養護教諭が果たしている役割について調査研究を行った。その結果については前回「発達障害の子どもへの支援に求められる養護教諭の役割Ⅰ」において明らかにした。その結果、養護教諭には発達障害(と思われる子どもも含む)の子ども達への支援者として重要な役割があることが明らかになった。

本論文では、発達障害の子ども達への支援に対して、養護教諭に求められる役割を、具体的なエピソードを通して考察していくことを目的とする。

Ⅱ. 方法

筆者(猪野)の特別支援学級における実践から、養護教諭とともに行ったエピソードについて取り上げ、考察をする。

エピソードの内容については、個人が特定できないように十分に注意をした記載内容とする。

Ⅲ. 養護教諭と発達障害の子ども達とのエピソード

以下の2つのエピソードは、筆者(猪野)が実際に学校において発達障害の子どもたちと関わる中で、養護教諭が登場するエピソードである。

〈エピソード①〉

Aくんは小学校5年生です。小学校始業式の日の出来事です。Aくんは担任との関係がうまくいかず教室を飛び出ることを繰り返し、前年度途中転校してきた子どもでした。転校後3学期途中から保健室登校になっていました。

そんなAくんが5年生になった始業式の出来事でした。新たに担任になった筆者(猪野)は始業式後、教室に行き渋るAくん「後でいいからゆっくりおいで」と声をかけ、養護教諭のB先生にAくんの様子を見ておいてくれるように頼んで教室へ向かいました。本当は1

年のスタートをクラス全員で始めたかったのですが、仕方ないかなあと思っていました。そのような思いを持って指導を始めた時に保健室から「Aくんが家に帰ると言ってます。」と電話がありました。猪野は急いで保健室へ向かうとAくんはまさに帰ろうとしていました。そこで猪野は「保健室に居て。みんなを呼んでくるからね。」とAくんに伝えて教室へ向かい、子どもたちに荷物をまとめさせ全員で保健室へ行きました。保健室へ入ると、養護教諭のB先生が、クラスみんなが入れるように椅子や机をすでに動かしてくれていました。猪野はそれを見て「これからも頼りになる先生だ」と感じました。そして、Aくんを含む26人全員で学級開きを終えることができました。

〈エピソード②〉

Cくんは、広汎性発達障害の診断を受けている2年生の男の子です。友だちと遊ぶことが大好きですが、自分の思いと違うと怒り手が出てしまいます。2年生になった5月のある日、1年生を連れて学校探検していましたが、担当していた1年生が言うことを聞かずに勝手な行動をするので次第にイライラし、Cくんは後半とうとうグループから離れて隠れてしまいました。しかし給食時間になり、友だちが隠れていたCくんを見つけ、「当番よ。行こう」と手を引っ張ってしまいました。まだ行きたくない気持ちと手を引っ張られたという2つのことで、Cくんは怒り出しました。

Cくんは激高して「殺す。あいつを叩く。」と叩きそうになってしまいました。猪野はCくんを止め、落ち着くように声をかけましたが、Cくんはとても興奮している時なので猪野の話が届きません。

「離せ。」

「離さないよ。離したら君は叩くんでしょ。」

「うるせえ。くそじじい。離せったら離せ。」

「離してもいいけど、叩くのやめてくれる？」

「叩く」

「じゃあ離せない。先生はCくんに友だちを叩いてほしくないからね。」

こんなやり取りをしながら猪野はCくんを抱きしめ続けました。40分ほどたって、給食時間も終わり昼休みになったころ次第に落ち着き、Cくんの身体から力が抜けてきました。そこで給食にしようと話し、どこで食べたいか尋ねると、「保健室で食べたい。」と言います。Cくんは保健室に給食を持って行き「先生は向こうで食べろ。」と指示します。そこで、保健室のD先生に、Cくんがなぜ怒ることになったのかを説明し、給食に付き合ってもらうようお願いしました。Cくんは給食を食べながらさらに落ち着いてきました。完全に落ち着いた5時間目、Cくんが怒ってしまった理由を代弁して伝え、イライラしたけど1年生を叩かなかったことと友だちを叩かずに終わったことをほめました。

Cくんのことは、共通理解しておく子どもとしてすでに全職員に基本的なことは伝えていました。また、Cくん自身、けがをしたり具合が悪くなったりした時に何度も保健室を訪れ、養護教諭のD先生とも関係が生まれ始めていた時であったのですが、給食を食べる場所として保健室を選択したのはCくん自身でした。D先生は猪野の説明を聞き、Cくんの気持ちに寄り添いながら対応をしてくれました。その後、給食を食べながらCくんと二人で話した内容について猪野に報告がありました。

Ⅳ. エピソードからの考察

養護教諭及び保健室という空間は、特別支援教育の推進が求められるよりもずっと以前から、一人一人に応じた支援を行うという、学校現場の中で重要な役割を果たしてきている。それは子どもの身体の健康の問題だけでなく、心に課題を抱えた子どもたちの居場所となってきたことは事実である。そして、保健室の存在に救われてきた子どもたちがこれまでも大勢いた。例えば、不登校の子どもへの保健室登校は広く実践されていることである。

エピソード①に登場するAくんも保健室登校になっていた子どもであった。前年度から保健室登校になったAくんと関わりを続けていた養護教諭の存在の大きさが現れているエピソードである。新学期にAくんを含めたみんなで学級のスタートを切ることが、Aくん自身にも必要なことをB先生は察知し、対応している心温まる支援の1シーンである。猪野は着任したばかりで、保健室のB先生とはまださほど関係が築けていない段階での出来事であったが、養護教諭としては前年度からAくんと信頼関係の構築を行ってきたことから、そのような場面においても適切にAくんの本当の思いをくみ取ることができ、さらに担任の願いをもくみ取るという二つの大切な視点を見落とさないでいたということが、迅速な判断と対応に結びついたと考えられる。そして、Aくんにとってもクラスにとっても、重要な1年のスタートをみんなで始めるということができたということは重要であった。養護教諭の働きの一つを具体的に表しているエピソードであると言えるであろう。

またエピソード②からは、混乱した気持ちはなんとか落ち着いたものの教室には戻りたくない。しかし、自分の行動を止めた猪野とも顔を合わせて給食を食べたくないというCくんの気持ちに沿うことができる物理的な場所として「保健室」という役割が顕著に表わしているということができる。もちろんそこには、Cくんの気持ちを受け止め暖かい雰囲気を迎えてくれる養護教諭の「気持ち」も重要である。またトラブルや不愉快な気持ちを想起させる教室などでは、またCくんの記憶が想起する可能性もある。そこでCくんにとって、日ごろからけがや病気の時に訪れていた保健室は、安全な場所として位置していたと推察される。そのような「安全な場所」としての保健室の存在は大きく、発達障害の子どもたちにとっての物理的環境の重要性を再考できるエピソードである。

学校における養護教諭の役割を考えるに当たり、そもそも「養護教諭」と「教諭」とでは

何が違うのであろうか。どちらも「教諭」という言葉がつく。教諭とは一般的に、小学校・中学校・高校で子どもたちに様々な学びを指導する、いわゆる「先生」と呼ばれる存在である。

養護教諭は、一般教諭と同様に、学校教育法に規定されている教育職員である。学校教育現場には、実に多彩なスタッフが存在する。直接子どもを担当し学習指導を中心に行う教諭（講師を含む）をはじめ、事務職員、校務職員、栄養士や給食調理員、図書館司書など様々な職域のメンバーの様々な仕事の分担の中で学校現場は機能している。そのスタッフの一員として養護教諭は存在している。子どもを育てるのは、校長でもないし、教育委員会でもないし、教諭一人の力でもない。前述した様々なスタッフが、それぞれの仕事をしながら、さらに時には子どもたちと関わりながら、子どもたちの発達を支えている。

教職員相互の協働が次第に薄くなりつつある状況を感じるようになってきたが、学校現場で子どもに関わる人々の協働は大切である。エピソード①やエピソード②もその「教員間の協働」が、子ども達の気持ちを支える場面を作り出している。その協働を支える中核をなすものは「子ども理解」をどう共有するのかということである。エピソード①では、赴任したばかりの担任を助ける形であり、またエピソード②では担任とのスピーディな情報の連携に表れている。まさに「子ども理解」を推進する一翼を担任と同様に養護教諭は担っていると感じられる内容である。つまり養護教諭は、心身の健康の専門家であると同時に、「教諭」として子どもの成長・発達を支援する直接的な関わりが求められる存在であると言える。

V. まとめと今後の課題

1. 「子どもを育てる」とはどういうことか

「人材育成」という言葉が使われるが、そこには誰かが求める能力を有する人として子どもを育てるという側面が強くにじみ出ている。教育の目的のひとつは、子どもたちがこれまでの人類が築いてきた文化を学び獲得していくことによって、社会で生きていくために必要な発達を遂げていくことを支援し、促していく過程である。そこには、子どもを人格ある一人の「人」として認めることが大前提として存在している。教育は、教育する人（指導・支援する人）と子どもの間で展開される。だからこそ、教育の場では、子どもを様々な発達の権利を持つ一人の人として捉えることが基盤として存在することにより、子どもを理解し働きかける関係が成立することが何より不可欠となる。そのような関係を築いていく中で、子どもの思いや願い、そして実態をふまえて教師らは様々な働きかけをし、そして子どもはその自分と関わる人を信頼し受け入れることにより、安心して学び、生活することができるようになるはずである。これこそが「信頼関係の構築」と言われるものである。

しかし、今日の学校現場で子どもたちは本当にそのような人と出会い、発達する権利を保障されているのであろうか。子ども一人一人の思いや願いより、「学力向上」が何よりも優先される風潮がますます強くなっていると感じることが多い。また、社会経済的な問題から

くる貧困や、精神的に未熟な親や子育て不安、親の病気など様々な要因から家庭で十分に愛情を受けることができない子どもたちが増加しており、そのような子どもたちが愛情を受けるために問題行動に走るケースも多く報告されている。このような状況の中で子どもたちは本当に成長できるのであろうかと疑問の感じる状況は多い。

子どもたちは、「子どもの権利条約」(1989年国連総会で採択、1994年国会で批准)が宣言するように、まずは、人として成長・発達する権利を持っている。学校において学習は大切な大きな部分ではあるだろう。しかし、その学習をも保障するものは、「安心して」学ぶことができる、発達する権利が守られているという学校という場が子どもたちにとって「安全な場所」として保障されていることである。

今、子どもたちが学校で安心して学習し生活できる場を作り出すという視点が強く求められており、学校の中で様々な原因により苦しむ子どもたちが、安心して生活できる場を創り出すことができるように、学校教育の中では大切に丁寧に取り組んでいかなければならないと考える。その重要な一翼を、養護教諭と養護教諭が管理する保健室は担っている。保健室には、毎日様々な子どもが訪れる。前述したように、現在保健室はけがや発熱等の応急処置の場であると同時に、様々な不適応を訴える子どもが日々訪れる場となっている。友だちとのトラブルの中で苦しみを訴える子ども、学習に不適応を起こして腹痛や頭痛を訴える子ども、虐待が疑われる子ども、いじめが疑われる子ども、そして、最近目立ってきているのが多動や粗暴な行動から教室にいられない子どもたちという不適応を起こしている子どもの大切な居場所の一つとなっている。頭痛や腹痛という身体的症状の奥にある子ども一人一人の「困り感」に気づき、寄り添い支援することが養護教諭の大切な役割となっている。

なぜ、不適応を起こした子どもは保健室を訪れるのであろうか。もちろん身体的症状が現れている場合が多いことは事実だが、それだけではない。そこには安心できる何かがあるからだ。前論文でも述べたが、学級担任は、その性質上一斉に大勢の子どもの指導にあたる。それ故に、その中で子どもの小さなサインを見落としがちになる。一方養護教諭は保健室を訪れた子どもと個別にゆっくりと接し観察ができる。それだけ担任が見逃しているサインを捉えることができる位置にいる。さらに、養護教諭はクラスを持つことはなく、子どもへの評価も行わない。「学力向上」や「過度な規律」が追求される現在、このことに子どもは安心感を抱いているのかもしれない。¹⁾ (矢野ら 2015)

このように養護教諭は担任とは異なる視点を持って子どもに接することのできる存在である。保健室で感じた子どもの奥に隠れたサインを見つけることや、子どもの気持ちに寄り添っていける位置にいることは間違いない。そういう意味においても養護教諭の存在は、学校の中で大切であり大きな存在だと言える。さらに、養護教諭としての気づきを担任に伝え、学校の中で連携が動き出すきっかけを作ることのできる存在であるとも言えよう。

2. 養護教諭に求められていること

養護教諭の関わる子どもは前述したように実に多様であるが、ここでは、発達障害の子どもへの対応の上で心がけてほしいことを述べる。筆者らは、実はその対応は基本的に全ての子どもへの対応に通じるものであると考えている。基本的な専門的な知識は必要であるが、それが様々な問題を解決する全てにはならないし、知識以上に必要なものがあると考えているからである。

そのような視点の上で、以下の2点を特に述べたいと思う。

(1) 発達障害についての理解

特別支援教育が推進されるようになって、障害を有する子どもたちへの基本的な知識と支援の在り方については以前に比較するとかなり進んできた。「自閉症スペクトラム」「アスペルガー症候群」「ADHD」「LD」「広汎性発達障害」等といった言葉の浸透も進んできてはいると感じる。だが、そこで留まっている感じもまだ受ける。さらには、教師自身がその障害名にこだわり、とらわれているようなエピソードも耳にすることがある。

養護教諭は、発達障害についての基本的な理解は必要である。それぞれの障害がどのような特徴を持っているのかを知ることは、その子どもの行動の意味やそこに隠されている心の苦しみを知る一つの手がかりになるので重要である。

しかし、障害の特性を知ることが大切ではあるが、実際の子どもとの関係の中では、どのような障害なのかという診断名が重要なのではなく、その子のつまずきの原因（何に困っているのか・どんな気持ちなのか）を理解し、その時の子どもの思いや願いにどう関わっていくのかということが何より大切である。その理解のためには、常に学校やクラスという集団の中において、「どんな状況で、どんな関わりをすると、どんな行動を示すのか」を検討していくことが求められてくる。その中で、有効な手立てを見いだしていく手がかりを見つけることができるはずである。しかし、そのためには、子どもと個別に真正面から関わるのが第一歩である。

(2) 子どもの思いを理解する・引き出す努力

子どもは様々な思いを持って生きているが、問題行動を起こす子どもや発達障害の子どもの本当の思いは見えにくいものである。

例えば、エピソード②に登場するCくんは、行動だけで見るならば、怒って友だちを叩くようにしている姿しか見えない。そうすると「友だちを叩くのは悪いこと」として注意される対象となる。しかし、Cくんの本当の思いは違う。イライラした気持ちを落ち着けようとまだ隠れていたかったのに、それを無理矢理引っ張って出そうとしたことに対する怒りからの行動であり、自分は精一杯がんばっていたのに言うことを聞いてくれない一年生への苛立ちからの行動であった。その本当の気持ちを整理して伝えてあげることで、Cくんは完全に落ち着きを取り戻していった。

また猪野の担任したDくんは、頻繁に教室から抜け出す行為を繰り返していた。Dくんも「広汎性発達障害」と診断された子どもでもある。思いが理解されないと、勝手に教室を抜け出すという行為だけが目につき、注意の対象となる。本人に尋ねても「知らん」「分からん」と言うばかりであったが、Dくんの行動にもきちんとした理由があった。学習内容が分からなくつまらなくなったり、時には、学習内容が自分の期待していたものとは違っていたために、学習時間に立てていた自分なりのストーリーがズレてしまった時、また時には、取り組んでいた作品が自分の描いた思い通りに進まないことへの苛立ちであったりというような隠れた思いが行動の裏にあったのである。

そのような本当の思いを知ろう、思いを引き出そうという努力をすることが教師には求められている。そのためには、子どもの視線からものごとを捉えてみることや、しっかりと話を聞いてあげることを大切にしなければならない。しかし子どもの思いを理解したり、子どもとの関係を築いていくには時間がかかるものである。時間をかけて関わりを積み上げることによって、少しずつ子ども理解は深まっていくのであることを忘れてはならない。

養護教諭に求められることは、養護教諭としての専門知識、障害に関する知識、これらはいずれも大切なものであるが、さらに必要なもの、求められているものは担任と同様に、子どもたちの成長・発達を見守る「人」として、子どもを丸ごと受けとめ、理解しようとする「感性」であると思う。それは、一人の発達する主体としての人であるという子ども観を磨いていく中で獲得できると筆者らは考えている。

養護教諭は、学校で教育を担う重要なスタッフの一員である。そのことに自信と誇りを持って、担任をはじめとする職員と協働して、子どもの成長・発達を支えてほしいと願っている。

参考文献・引用文献

- 1) 日本養護教諭教育学科理事会：日本養護教諭教育学会の英語表記に関する検討の経緯について、日本養護教諭教育学会誌，7（1），95～102，2004
- 2) 文部科学省：養護教諭の新たな役割と求められる資質，平成9年保健体育審議会答申
- 3) 矢野洋子、荒木みなみ、猪野善弘：「発達障害の子どもへの支援に求められる養護教諭の役割Ⅰ」九州女子大学紀要 第52巻1号，P57～66，2015
- 4) 「ゆめ工場“このゆびとまれ！”～休み時間を交流の広場に～」『生活指導』1993年11月臨時増刊号（明治図書）
- 5) 「みんなで紡いだ物語～障害児学級ってなんだろう～」『生活指導』2001年11月臨時増刊号（明治図書）
- 6) 「ひとりじゃ何もできないからこそ～保護者と歩むこと・仲間と歩むこと～」『生活指導』2007年7月号（明治図書）
- 7) 「ユウスケの願いに寄り添う～納得と合意、つながりを紡ぐ～」『困っている子と集団づ

くり 発達障害と特別支援教育』湯浅恭正編著 2008年（クリエイツかもがわ）

⁸⁾「季節の行事で盛り上がろう」『生活指導』2009年1月号（明治図書）

⁹⁾「安らぎと活力をはぐくむ教室に～特別支援学級の教室環境～」『生活指導』2011年12月号（明治図書）

Role of school nurses in care of children with developmental disorders, Part 2

Yoko YANO*¹, Yoshihiro INO*²

*¹Kyushu Women's Junior College, Child Healthy Subject of Study

Abstract

Due to environmental changes for modern day children, the school nurses require specialized skills and knowledge to conduct their job. On top of being able to provide care for typical injuries, illnesses, and guidance for health, school nurses are required to provide psychological support to children from differing domestic environments, aid children with developmental disorders, and support the child's guardians.

The "Role of school nurses in care of children with developmental disorders, Part 1" intended to clarify the role of school nurses in supporting children with developmental disorders in schools because school nursing offices are often utilized to aid children with developmental disorders. Furthermore, interactions with children with developmental disorders are increasing and their needs require specialized knowledge and skills.

This paper utilizes cases within the school setting to propose the role of school nurses.

The result of the research indicates that school nurses interact with children with developmental disorders more often than homeroom teachers. The nurses are, therefore, more likely to notice difficulties the child may face. The nurses are also in a position to share such information with the school and are poised to be involved in supporting the children. Although nurses clearly require specialized skills and knowledge to deal with such conditions, this research identifies that a foundation of trust and a loving concern for the children are essential to providing care.

Keyword : school nurse developmental disorder child support cooperation at school